心的因果の問題とシューメイカーの性質の形而上学

金 杉 武 司*

The Problem of Mental Causation and Shoemaker's Metaphysics of Properties

Takeshi KANASUGI*

Abstract

Mental causation is one of the major problems in the philosophy of mind. It is a big problem not only for dualism but also for physicalism because even physicalists, as long as they accept the multiple realizability of mental properties, cannot identify mental properties with physical properties, therefore, they seem to be forced to exclude mental properties from physical causal relations. Sydney Shoemaker recently proposed interesting metaphysics of properties as a physicalist solution to this problem. According to Shoemaker, causal powers are essential to properties, and a realized property is a part of its realizer. This paper aims to assess the possibility of a physicalist solution to this problem through a critical examination of the adequacy of his solution.

1. はじめに

心の哲学の大きな問題の一つに「心的因果の問題」がある。この問題に対する物的一元論の立場からの解決策として、近年、S・シューメイカーが、興味深い性質の形而上学を提示している。本稿の目的は、このシューメイカーの解決策の妥当性とそのあるべき姿について批判的に考察することによって、心的因果の問題の物的一元論による解決可能性を検討することにある。

以下では、まず第2節で、「心的因果の問題」とはどのような問題であるのかを説明し、物的一元論がこの問題を解決するには、どのような解決策が必要であるのかを示す。第3節で、その解決策として、シューメイカーの性質の形而上学を紹介する。続く第4節と第5節では、J・ハイルのある議論に基づき、シューメイカーの性質の形而上学は結局、トロープ説に帰着するのではないか、そして、そのために心的因果の問題の解決策としてのその妥当性が損なわれてしまうのではないかという問題を提起する。そして、最後の第6節において、以上の問題提起を受け、シューメイカーの性質の形而上学は本当にトロープ説に帰着するのか、

トロープ説に帰着するとしたら本当にその妥当性は損なわれるのか、といった点を検討することを通して、シューメイカーの解決策の妥当性とそのあるべき姿を探る。

2. 心的因果の問題と物的一元論

われわれは通常、欲求や信念といった心的状態が原因で身体運動が生じる「心的因果」を認める。たとえば、タクシーを止めたいという欲求と、タクシーに向かって手を挙げればタクシーは止まるという信念が原因で、タクシーに向かって手を挙げるという身体運動が生じたというのがその一例である。

そして、われわれは通常、それらの心的状態に含まれるある特定の心的性質のゆえに身体運動が引き起こされると考える。そのような「因果的効力」を持つ心的性質としては、心的状態の志向的内容やクオリアが挙げられる。たとえば、先の例で言えば、タクシーに向かって手を挙げるという身体運動が生じたのは、欲求と信念がそれぞれ、タクシーを止めるという内容と、タクシーに向かって手を挙げればタクシーは止まるという内容を持っていたためであると考えられる。

しかし、他方で、自然科学が発達した現代では、す

* 高千穂大学人間科学部

Takachiho University, Faculty of Human Sciences

すべての物理的結果に、それを引き起こすのに十分な物理的原因があり、そこで因果的効力を発揮した何らかの物理的性質があるという「物理的完全性」を多くの哲学者が認める。たとえば、先の、タクシーに向かって手を挙げるという物理的な身体運動にも、脳のある部位の興奮状態という十分な物理的原因があると考えられる。そして、その脳状態には、因果的効力を発揮した何らかの物理的性質があると考えられるのである。

これはどういうことだろうか。心的状態の心的性質が、身体運動を引き起こす際に因果的効力を発揮したということは認められなくなるのだろうか。二元論のように、心的性質と物理的性質を全く異質の異なる二つの性質として理解するならば、物理的完全性により、心的性質が因果的効力を発揮する余地はなくなってしまふ¹。つまり、心的因果は成立しないことになってしまうのである。これを、心的なものの「因果的排除」と呼ぶ。そして、本稿で「心的因果の問題」と呼ぶのは、この因果的排除に対して、いかにすれば心的性質の因果的効力や心的因果の成立を説明できるのか、という問題のことである。

それでは、二元論とは異なり、心的なものを物理的なものとして世界のうちに位置づけようとする物的一元論ならば、心的因果の問題を解決できるのだろうか。物的一元論において、心的性質を何らかの物理的性質と同一視できるとすれば、心的因果の問題を解決することができる。なぜなら、その場合、心的性質が因果的効力を発揮するということは、何らかの物理的性質が因果的効力を発揮することにほかならないことになるからである。

しかし、物的一元論において、心的性質を何らかの物理的性質と同一視することには、大きな障害がある。それは、物的一元論においても、心的性質には、さまざまなタイプの物理的性質によって実現可能であるという「多型実現可能性」があると考えられるからである。たとえば、人間とロボットが、いずれも痛みを感じるというタイプの心的状態にあるとしよう。この考えによれば、この痛みの感覚は、細胞でできた脳を持つ

人間と、シリコンチップでできた「脳」を持つロボットとでは、異なるタイプの物理的状態によって実現されていると考えられる。これは、性質に関して言えば、痛みの状態に特有の心的性質（以下では「痛み性質」と呼ぶ）が、異なるタイプの物理的性質によって実現されているということにほかならない。そして、この実現関係を、同一性関係として理解することはできない。たとえば、心的性質 M が異なる物理的性質 $P1$ 、 $P2$ によって多型実現されている場合、 M と $P1$ 、 $P2$ がそれぞれ同一であると考えすることはできない。なぜなら、「 $M=P1$ 」と「 $M=P2$ 」がともに成立するとすれば、「 $P1=P2$ 」が成立することになり、 $P1$ と $P2$ が異なる物理的性質であるという前提に反してしまうからである。このため、被実現性質（心的性質）は、通常、「さまざまな実現性質のうちの一つを持つ」という、実現性質（物理的性質）とは全く別の性質として理解されることになる。

こうして、心的因果の問題はジレンマの形で姿を現す。心的性質（被実現性質）を物理的性質（実現性質）と同一視するならば、心的因果の問題は解決できる。しかし、この選択肢は、心的性質の多型実現可能性に反してしまう²。他方で、心的性質と物理的性質を全く別の性質として考えるとすると、その点では二元論と同様になり、たとえ物的一元論の枠組みを選択するとしても、心的因果の問題を解決することができないように思われるのである。

これに対して、これまで物的一元論の立場からさまざまな解決策が提案されてきた。しかし、そのいずれもが十分な説得力を持つに至っているとは言い難い。ここでその詳細を説明することはできないが、それらの提案はどれも上のジレンマの二つの角のいずれかを選択しているという点にその原因があるように思われる。つまり、物的一元論において心的因果の問題を解決するためには、上のジレンマの二つの角とは別の第三の選択肢を示さなければならないように思われるのである³。

¹ 心的性質と物理的性質がともに十分な因果的効力を発揮していると考えすることは難しい。なぜなら、一つの結果に対して十分な原因が複数あるという「過剰決定」は、ありうるとしても、ごく希なことにすぎないと考えられるからである。心的因果に関して過剰決定を認めるとしたら、身体運動の度に過剰決定が生じていることになってしまう。なぜそのようなことが生じるのかに関する十分な説明がない限り、これは認めがたい。

² 被実現性質を実現性質と同一視できないため、因果的効力を認めることができなくなってしまうという点は、心的性質だけでなく、物理学以外の個別科学の性質一般に当てはまることである。たとえば、化学的性質も心的性質と同様に、物理的性質によって多型実現可能であると考えられるので、物理的完全性のゆえにその因果的効力を認めることができなくなってしまうという問題が生じる。

³ たとえば、J・キム (Kim [1998]) の解決策は、多型実

以上の見積もりが正しいとするならば、物的一元論者は、近年、シューメイカーが提示している性質の形而上学に注目すべきである。なぜなら、シューメイカーの性質の形而上学は、まさに心的因果の問題を解決可能とする第三の選択肢を示してくれていると考えられるからである。次節では、そのシューメイカーの解決策を見ることにしよう。

3. シューメイカーの性質の形而上学：性質因果説と実現理論

シューメイカーの解決策は、「性質因果説」とでも呼ぶべき彼の性質の理論に基づくものである。それゆえ、まずは、その性質因果説を紹介することから始めよう。

3.1 シューメイカーの性質因果説

シューメイカーは、まず事物が端的に因果的力能を持つということに着目する。シューメイカーによれば、

事物が端的に因果的力能を持つということは、その事物が、ある状況、たとえばそれがある種類の他の事物とある仕方で関係するという状況にあれば、ある結果を引き起こす（ないし、引き起こすことに貢献する）ということである。(Shoemaker [2001] p.430)

つまり、事物が端的に因果的力能を持つということは、状況（他の事物との関係）から因果的結果への関数として理解することができるのである (Shoemaker [1980] p.212)。

シューメイカーは、ここでさらに、性質から端端的な因果的力能への関数として理解することのできる「条件的力能」という概念を導入する (Shoemaker [1980] p.212)。つまり、

事物がある条件的力能を持つのは、その事物が、あ

現可能性と衝突する第一の角を選択するものであり、J・フォード (Fodor [1989]) や T・バージ (Burge [1993]) のように、法則性や反事実的条件文の成立に訴える解決策は、結局のところ、二元論と同様に心的性質を物理的性質と全く別の性質と捉える限りにおいて、心的因果の問題を解決することはできないように思われる。これらの点については、別の機会において詳細に論じたいと思う。本稿では、本文の以下に示すように、これらの見積もりが正しいという前提の下で、物的一元論に第三の選択肢が残されているのかどうか、残されているとしたらそれはどのようなものであるべきなのかを検討したい。

る性質を持つとしたら、ある因果的力能を端的に持つという場合である。ただし、その性質は、それ自体でその因果的力能を端的に事物に付与するには十分でないとする。(Shoemaker [2001] p.431)

たとえば、ナイフの形をした事物は、鉄製（という性質を持つ）ならば木を切ることができる、という条件的力能や、木製（という性質を持つ）ならばバターを切ることができる、といった条件的力能を持つ（そして、たとえば、ナイフの形をした鉄製の事物は、それが木に一定の力で押し当てられるという状況にあれば木を切るという結果を引き起こす、という因果的力能を端的に持つ）のである。

シューメイカーの性質因果説によれば、性質とはこのような条件的力能の束にほかならない (Shoemaker [1980] p.213)。たとえば、ナイフの形という性質は、鉄製ならば木を切ることができる、という条件的力能や、木製ならばバターを切ることができる、といった条件的力能の束として理解することができる。それらの条件的力能を事物に付与するもの、これが性質にほかならないのである⁴。

3.2 シューメイカーの実現理論

さて、シューメイカーは以上の性質因果説に基づいて、次のように、性質同士の実現関係の説明を試みる。すなわち、一般に、性質 X が性質 Y によって実現されるのは、X の条件的力能⁵の集合が、Y の条件的力能の集合の部分集合であるときであり、かつそのときに限られる (Shoemaker [2001] p.432)⁶。以下ではこれ

⁴ シューメイカーは、事例を挙げてはいないが、性質の中には端的に、つまりそれ単独で、ある因果的力能を事物に付与するものもあり、それは、性質が事物に条件的力能を付与するというものの特殊ケースとして理解できると言う (Shoemaker [2001] p.431)。確かに、ある性質が因果的力能を事物に端的に付与する場合であっても、ある性質が事物に条件的力能を付与する場合と同様に、性質の本質を、事物の因果的力能の保有への貢献として理解できるという点では違いがないと言えよう。それゆえ、シューメイカーの言うとおり、前者を後者の特殊ケースとして理解することは妥当であるように思われる。

⁵ 正確には「性質 X が事物に付与する条件的力能」と言うべきであるが、以下ではこのように簡略表現する。

⁶ ここで言う「条件的力能」は、性質を持つ因果的特徴のうち、性質の実例がどのような結果をもたらすに関する特徴であるという意味で「未来方向の (forward-looking) 因果的特徴」と呼ぶべきものであるのに対して、性質には、そのほかに、性質の実例がどのような

を「実現理論」と呼ぶことにしよう。

この実現理論によれば、心的性質 M が、物理的性質 $P1$ と $P2$ によって多型実現可能であるとは、次のようなことにほかならない。すなわち、 M の条件的力能の集合が、 $P1$ の条件的力能の集合と $P2$ の条件的力能の集合の両方に共通する真部分集合だということである⁷。このように考えるならば、物理的性質 $P1$ や $P2$ がある身体運動に対して因果的効力を発揮したと考えられる場合に、心的性質 M の因果的効力を否定する必要はない。なぜなら、 $P1$ や $P2$ の条件的力能の集合のうちに、 M の条件的力能の集合が真部分集合として含まれているからこそ、 $P1$ や $P2$ は因果的効力を発揮できたと考えられるからである (Shoemaker [2001] p.433)⁸。

たとえば、痛み性質の条件的力能の集合は、さまざまな痛みのふるまいを結果として生じるようなさまざまな条件的力能から成るとしよう。そして、この痛み性質が、 $P1$ と $P2$ という物理的性質によって実現されているとしよう。 $P1$ と $P2$ は異なる物理的性質であるので、それらの条件的力能の集合には異なる条件的力能が含まれていると考えられる。 $P1$ が細胞でできた脳の物理的性質で、 $P2$ がシリコンチップでできた「脳」

の物理的性質であるとするれば、両者の条件的力能には、たとえば、耐熱性に関して異なる条件的力能が含まれているだろう。しかし、両者の条件的力能の集合はともに、さまざまな痛みのふるまいを結果として生じるようなさまざまな条件的力能の集合を真部分集合として持つと考えられる。それゆえ、 $P1$ や $P2$ がさまざまな痛みのふるまいを引き起こしたとしても、痛み性質が因果的効力を発揮したことを否定する必要はないのである⁹。

⁹ 痛み性質の条件的力能である「さまざまな痛みのふるまいを結果として生じるようなさまざまな条件的力能」とは、より具体的にはどのようなものなのだろうか。シューメイカーは、「痛みのふるまい」の一例として、「アスピリンを取りに行く」という意図的行為を挙げるだけで、それ以上はほとんど何も語っていない (Shoemaker [2001] p.433)。しかし、以下に示すように、そのままこの問いを受け流すことはできないように思われる。

「アスピリンを取りに行く」といった意図的行為を生み出すものとして捉えられる条件的力能を「 $CP(M)$ 」と呼ぶことにしよう。これが痛み性質の条件的力能であるとするならば、 $P1$ と $P2$ の条件的力能の集合には、どちらにも $CP(M)$ が含まれていることになる。しかし、他方では、痛み性質を $P1$ が実現する場合と、 $P2$ が実現する場合とでは、その痛みのふるまいを異なる仕方でも物理的に記述することもできるように思われる。たとえば、 $P1$ が人間の脳の物理的性質である場合には、その痛みのふるまいは、神経や筋肉の何らかの神経生理学的状態として捉えることができるだろう。この神経生理学的状態に言及する条件的力能を「 $CP(P1)$ 」と呼ぶことにしよう。他方で、 $P2$ がロボットの「脳」の物理的性質である場合には、その痛みのふるまいは、何らかの電気工学的状態として捉えることができるだろう。この電気工学的状態に言及する条件的力能を「 $CP(P2)$ 」と呼ぶことにしよう。さて、 $P1$ と $P2$ の条件的力能の集合には、それぞれ、 $CP(P1)$ や $CP(P2)$ の他に、 $CP(M)$ も含まれているのだろうか。もし含まれているのだとしたら、痛みのふるまいが生じる際に関与した条件的力能はどちらなのだろうか。もし、それぞれ $CP(P1)$ と $CP(P2)$ が関与していたのであって、 $CP(M)$ は何の関与もしていなかったのだとしたら、結局のところ、条件的力能のレベルで心的なものは因果的に排除されていくことになってしまうのではないだろうか。シューメイカーの実現理論で心的因果の問題を解決するためには、この問題に答える必要があるように思われる（私はこの問題の問題性を、柴田正良氏の私信における指摘によって認識した）。

私は、この問題に対して、暫定的にはあるが、次のように答えておきたい（この答えの妥当性に関する詳細な検討は今後の課題としたい）。痛み性質の条件的力能として $CP(M)$ を挙げるべきではない。痛み性質は、 $CP(P1)$ や $CP(P2)$ などによって構成されていると考えるべきである。そして、 $CP(P1)$ や $CP(P2)$ などはいずれも、各実現性質（ $P1$ や $P2$ など）の条件的力能の一つなのである。つまり、 $CP(P1)$ は $P1$ の条

原因で生じるかに関する特徴であるという意味で「過去方向の (backward-looking) 因果的特徴」もあると考えられる。シューメイカーによれば、性質の同一性にとってはこの過去方向の因果的特徴も本質的である (Shoemaker [1998] p.412) が、実現関係の説明に過去方向の因果的特徴を組み込む必要はない (Shoemaker [2001] p.432, p.433 n.8)。

⁷ シューメイカーによれば、（たとえば、赤と緋色といった）性質間の確定 (determination) 関係も、この実現理論で説明される (Shoemaker [2001] p.441)。すなわち、性質 X が性質 Y にとっての確定可能 (determinable) 性質であり、性質 Y が性質 X にとっての確定的 (determinate) 性質であるのは、 X の条件的力能の集合が、 Y の条件的力能の集合の真部分集合であるときであり、かつそのときに限られる。つまり、シューメイカーの理論によれば、確定関係とは実現関係の一種にほかならないのである (Shoemaker [2007] p.23 n.16)。これは、実現関係を確定関係の一種として理解する S・ヤブローの見解 (Yablo [1992]) とは対照的である。また、E・ファンクハウザー (Funkhouser [2006]) によるシューメイカー批判は、シューメイカーの立場とヤブローの立場との混同に基づいている。

⁸ シューメイカーによれば、身体運動の発生にとって「十分」だという意味での因果的効力（因果的十分性）と、「必要十分」だという意味での因果的効力（因果的必要十分性）を区別するならば、前者は、心的性質と物理的性質の両方に認めることができるが、後者は心的性質にのみ認められる (Shoemaker [2001] p.436)。

このように、シューメイカーの実現理論は、心的因果の問題を解決してくれるように思われる。そして、この解決策の眼目は、被実現性質と実現性質の関係を理解する際に、「同一性が全くの非同一性か」という選択肢のほかに、「部分全体関係」という第三の選択肢を用意した点にあると考えられる。なぜなら、まさにこの点がジレンマからの脱出を可能にしているからである。

4. 問題提起：還元的性質因果説の放棄と実現理論

以上のように、シューメイカーの実現理論は、心的因果の問題を解決することができるように思われる。しかし、実を言うと、前節で紹介したシューメイカーの実現理論は、シューメイカー自身が提示したものとは一点だけ異なる。それは、実現理論を提示したときに、シューメイカーは、性質を条件的力能の束に還元する還元的な性質因果説（以下では「性質因果説」を単に「因果説」と呼ぶことにする）を放棄していたと

件的力能であるだけでなく、P2 など他の実現性質の条件的力能でもあり、CP(P2) は P2 の条件的力能であるだけでなく、P1 など他の実現性質の条件的力能でもあるのである。

この点は、にわかには認めがたいかもしれない。しかし、P1 と P2 がともに痛み性質を実現しているということは、多型実現可能性を認める機能主義によれば、P1 の例化である脳状態 B1 と、P2 の例化である「脳」状態 B2 が、どちらも単独で、同じ心的状態（痛み）の機能を担っているということである。これは、B1 を B2 に入れ替えても脳全体としては同様に機能するということを意味する（逆に、このような部分的入れ替えが不可能であり、B1 や B2 の周辺の脳状態も一緒に入れ替える必要があるのだとしたら、P1 や P2 が単独で痛み性質を実現していることにならない。そして、その場合には、B1 や B2、およびそれらの周辺の脳状態全体において例化されている物理的性質 P1*や P2*によって痛み性質が実現されていることになるが、今度は P1*や P2*に関して同じ入れ替えの議論をつくらなければならない）。そしてこれは、P2 を持つ主体が、(P1 を持つ主体の脳で例化されているような) 他のさまざまな神経生理学的な性質も同時に持つならば、(たとえば、アスピリンを目にするというような) しかるべき状況では (たとえば、アスピリンを取りに行くことであるような) ある神経生理学的状態を生じる、ということである。これは結局、P2 が事物 (主体) に CP(P1) を付与するということにはほかならない。このように、機能主義や多型実現可能性の考えに従う限り、CP(P1) や CP(P2) がいずれも P1 や P2 の条件的力能であると考えられることは可能であるように思われる。そして、条件的力能のレベルで心的なものが因果的に排除されることを避けるためには、以上のように考える必要があるのではないだろうか。

いう点である (Shoemaker [1998] p.413)。

シューメイカーは、還元が不可能だとする根拠として、力能の概念のうちに性質の概念が含まれているという点を挙げる (Shoemaker [1998] p.412)。力能の概念のうちに「ある結果が引き起こされる」ということが含まれる。そして、「結果が引き起こされる」ということのうちには、ある性質が例化されるということ (あるいは、その実例が生じるということ) が含まれる。この性質と力能の間の概念的相互依存関係のゆえに、性質を条件的力能の束に還元することはできないというのである。

果たして、この変更は先に示したシューメイカーの実現理論の姿を大きく変えることにはならないのだろうか。また、その理論の妥当性に何らかの影響を及ぼすことはないのだろうか。

この点を考察する上で、ハイルが興味深い論点を提示している。ハイルの議論 (Heil [2003] p.24) によれば、非還元的因果説は、少なくともその自然なりゆきとしてトロープ説に帰着するように思われる (詳しくは次節で示す)。ところが、シューメイカー本人はトロープ説を否定しているのである。そして彼は、その理由として、トロープ説では心的因果の問題を解決できないという点を挙げる (Shoemaker [2001] pp.433-4) (この点は第 6 節で詳しく紹介する)。もしこれらの議論が妥当であるならば、シューメイカーは、還元的な因果説を放棄することによって、自らを窮地に追いやることになるように思われる。果たして、それらの議論は妥当なのだろうか。以下では、この点を検討したい。

5. 実現理論からトロープ説への道筋

本節では、ハイルの議論を詳しく紹介する。まずハイルは、還元的因果説を放棄し、非還元的因果説に後退した場合、被実現性質が実現性質の部分を成すと文字通りには言えなくなるというシューメイカーの記述 (Shoemaker [2001] p.435 n.11) に着目する (Heil [2003] p.23)。なぜそうなるのかについては、シューメイカーもハイルも明言していない。しかし、考えられる一つの道筋は、次のようなものだろう。性質に条件的力能の束に尽きない本質的な要素があるとすれば、実現性質の条件的力能の集合のある真部分集合が、被実現性質の条件的力能の集合に等しいとしても、その真部分集合をそのまま被実現性質と同一視することはできない。被実現性質を実現性質に還元することがで

きないというのは、このように性質に条件的力能の束に尽きない本質的な要素があるということであり、だからこそ、条件的力能の集合同士の部分全体関係をそのまま性質同士の関係に置き換えることはできないのである¹⁰。

もっとも、シューメイカーによれば、これは、被実現性質の実例が実現性質の実例の部分で成すことの否定までは含意しない (Shoemaker [2001] p.435 n.11)。彼は、その点について次のように説明している (Shoemaker [2001] pp.434-5)。普遍者としての性質そのものは、条件的力能の束としては理解できない。しかし、性質の実例は、その性質によって事物に付与される条件的力能の束として理解できる。それゆえ、被実現性質の実例を実現性質の実例の部分として理解することができるのである。

ハイルによれば、これは、普遍者としての性質が事物の「うち」に文字通りにあるわけではないということの意味する (Heil [2003] p.24)。文字通り事物の「うち」にあると言えるのは、条件的力能の束である性質の実例にすぎないのである。しかし、そうであるとするならば、普遍者としての性質は、事物が力能を発揮し因果関係を生じさせる際に、何の役割も果たしていないことになる。それゆえ、普遍者としての性質が存在する必要性が不明になってしまう、とハイルは言う (Heil [2003] p.24)。

ここでハイルは、シューメイカーの性質の形而上学の問題を引き継ぎつつ、心的因果の問題を解決できる立場として、トロープ説を提示する (Heil [2003] pp.24-5)。トロープ説によれば、存在するのは個別者としての性質であるトロープのみであり、普遍者としての性質は存在しない。あらゆる性質タイプは、類似する諸トロープのクラスとして再解釈される。このトロープ説によれば、心的性質 M が物理的性質 P1、P2 によって多型実現可能であるとは、P1 のクラスに属する諸トロープと P2 のクラスに属する諸トロープがすべて、M のクラスにも属するというにほかならない。したがって、個々のトロープとしては、実現性質 P1 や P2 のト

ロープは、被実現性質 M のトロープと同一であることになる。つまり、物理的性質 P1 のあるトロープが因果的効力を発揮するということは、心的性質 M のあるトロープが因果的効力を発揮するということにほかならない。ハイルによれば、このように、トロープ説によって心的因果の問題は解決可能なのである (Heil [2003] pp.24-6)。

6. 実現理論のあるべき姿

さて、非還元的因果説をトロープ説に結びつける以上のハイルの議論は妥当な議論なのだろうか。そもそも、その「結びつき」とは「帰結」関係に等しい強い結びつきなのだろうか。そして、トロープ説で心的因果の問題は本当に解決できているのだろうか。結局のところ、シューメイカーの性質因果説に基づく実現理論は心的因果の問題を解決できるのだろうか。最後に、本節でこれらの疑問について検討することを通して、シューメイカーの実現理論の妥当性とそのあるべき姿について考察したい。

6.1 非還元的因果説とトロープ説の結びつき

まず、非還元的因果説をトロープ説に結びつけるハイルの議論について検討してみよう。この議論は以下の三つのステップに整理できる。

- ステップ① 非還元的因果説は正しい ⇒ 因果関係において役割を果たすのは性質の実例であり、普遍者としての性質は何の役割も果たしていない
- ステップ② 因果関係において役割を果たすのは性質の実例であり、普遍者としての性質は何の役割も果たしていない ⇒ 普遍者としての性質の存在は認められない
- ステップ③ 普遍者としての性質の存在は認められない ⇒ 残る選択肢はトロープ説だけである

まず①が帰結関係であることは、少なくとも一見する限り、異論がないように思われる。非還元的因果説では、普遍者としての性質が文字通り事物の「うち」にあるとは言えなくなってしまうからである。それでは、②は帰結関係と言えるだろうか。ここには異論の余地があるかもしれない。なぜなら、因果関係における役割以外に、普遍者としての性質の存在を認めるべき理由があると言えるかもしれないからである。しかし、少なくとも、心的性質や被実現性質一般の因果的

¹⁰ ただし、この「条件的力能の束に尽きない本質的な要素」は、クウィディティ (quiddity) とは異なり、条件的力能の束から独立であると考えすることはできない。そうでなければ、性質因果説を放棄することになってしまうからである。しかし、条件的力能の束はこの要素から独立であると考えられる。そうでなければ、性質同士の部分全体関係を否定する必要はないからである。

効力を説明するという文脈では、普遍者としての性質の存在は必要ないことになってしまうように思われる。この限りで、以下では②も妥当であるとみなすことにしよう。

問題は③である。確かに、普遍者としての性質の存在が認められない以上、残るのは、個別者としての性質、すなわちトロープである。それゆえ、存在者としてトロープしか認めないという意味では、確かに、「トロープ説」が帰結すると言えよう。しかし、問題は、「トロープ説」ということで、より詳細にはどのような立場が念頭に置かれているかという点である。なぜなら、以下に見るように、「トロープ説」にもいくつかの立場が考えられ、そのどれを念頭に置くかによって、心的因果の問題が解決できるかどうかが変わってくると考えられるからである。

6.2 トロープ説と心的因果の問題の解決可能性

次に、トロープ説で心的因果の問題を解決できるのかという点を検討しよう。この問いに対しては、シューメイカー自身が否定的に回答している。先に見たように、トロープ説によれば、被実現性質のトロープ（実例）と実現性質のトロープ（実例）は同一のトロープ（実例）にほかならない。しかし、シューメイカーによれば、被実現性質の実例と実現性質の実例の同一性を認める立場は、次のような困難に直面する。すなわち、その性質の実例が因果的効力を持つのは、それが被実現性質の実例だからではなく実現性質の実例だからであり、結局のところ、被実現性質（としての側面）に因果的効力はないことになってしまうのではないか、という困難である (Shoemaker [2001] p.434)。

シューメイカーが指摘するこの困難は、被実現性質と実現性質を全く非同一のものとして理解するどの立場にも必ずついて回る困難にほかならない。シューメイカーは、「トロープ説」として、被実現性質のトロープと実現性質のトロープの、トロープそのものとしての同一性を認めつつ、その被実現性質としての側面と、実現性質としての側面を、全く非同一のものとして理解する立場を念頭に置いている。このトロープ説は、まさにこの点で、シューメイカーが指摘する困難を回避することができないだろう¹¹。

¹¹ D・ロブら (Robb [1997]; Ehring [2003]) が心的因果の問題の解決策として提案しているトロープ説は、まさにこのような立場として理解できる。ロブは、以上の批判には、性質の性質（側面）を想定する混乱した存在論

しかし、実を言うと、ハイルは、トロープ説として、以上のように、被実現性質としての側面と、実現性質としての側面を、全く非同一のものとして理解する立場に言及する¹²だけでなく、次のような自らの独自のトロープ説も示している。ハイルによれば、あるトロープがある性質のトロープであるのは、それがその性質の条件的力能を事物に付与するからにほかならない (Heil [2003] p.25)。つまり、あるトロープがある被実現性質のトロープであるのは、それがその被実現性質の条件的力能を事物に付与するからであり、また、その同一のトロープがある実現性質のトロープでもあるのは、それがその実現性質の条件的力能をも事物に付与するからなのである。したがって、それらの条件的力能の集合同士の間部分全体関係が成り立つと言えれば、被実現性質としての側面と、実現性質としての側面を、全く非同一のものとして理解することにはならない。ハイルのトロープ説は、むしろ、性質間の部分全体関係というシューメイカーの実現理論の眼目を継承するものである。したがって、シューメイカーの実現理論は、ハイルのトロープ説という形でも、心的因果の問題を解決できると考えられる¹³。

が含まれていると切り返している。つまり、件のトロープは端的に因果的効力を持つのであって、どの性質の実例であるがゆえに因果的効力を持つのかと問うことはできないということである (Robb [1997] pp.190-1)。

しかし、類似性の観点となる性質の側面（あるいは性質の性質）を考慮することができないのだとしたら、先のトロープ説による多型実現可能性の説明に従う限り、同じ二つのトロープが、端的に類似していると同時に類似していないという理解不可能な関係に立つことになってしまう。たとえば、ともに心的性質 M のトロープでもある物理的性質 P1 のトロープと物理的性質 P2 のトロープは、端的に、類似するトロープとして一つのクラスにまとめられると同時に、類似しないトロープとして別々のクラスに分けられることになる。これらが同一のクラスに属すると同時に異なるクラスに属するということは、同一のトロープに心的性質としての側面と物理的性質としての側面という異なる二つの類似性の観点があると考えない限り、理解可能にはならないだろう。

¹² ハイルは、トロープ説の一つとして、まさにロブの立場 (Robb [1997]) を挙げている (Heil [2003] p.24 n.14)。

¹³ 一見すると、トロープ説には、さらにもう一つ選択肢が残されているように思われる。それは、被実現性質のトロープと実現性質のトロープの関係を、ハイルのトロープ説のように同一性として理解するのではなく、部分全体関係として理解する立場である。つまり、普遍者としての性質の存在を否定した上で、シューメイカーが還元因果説を放棄した際に主張した「被実現性質の実例と実現性質の実例の部分全体関係」を認め

以上のように、還元的因果説の放棄は、シューメイカーにとって自らを窮地に追いやる選択ではないように思われる。非還元的因果説からは、トロープの存在しか認めないという意味での「トロープ説」が帰結するが、そのトロープ説は必ずしも心的因果の問題を解決できないものではないように思われるのである。そして、以上のように心的因果の問題を解決できるようなトロープ説が、シューメイカーの実現理論のあるべき姿であるということになるのではないだろうか。

6.3 普遍者としての性質と個別者としての性質の関係

しかし、ここでもう一度立ち止まって考えてみたい。性質が条件的力能の束に還元されるという考え方を放棄したシューメイカーにとって、本当に、以上のような選択肢は残されているのだろうか。

先に見たように、シューメイカーの見解では、この還元不可能性は、普遍者としての性質にのみ当てはまるものにすぎず、個別者としての性質（性質の実例、トロープ）に当てはまるものではなかった。しかし、普遍者としての性質を条件的力能の束に還元できないということが、シューメイカーが主張するように、普遍者としての被実現性質と実現性質の間の部分全体関係

る地点にとどまるという選択肢である。そして、この第三の選択肢は、まさに性質間の部分全体関係というシューメイカーの実現理論の眼目を、トロープのレベルで文字通りに保持するものであり、心的因果の問題を解決できるように思われる。私も当初は、トロープ説にはこの第三の選択肢もあると考えていた。

しかし、現在では、この選択肢は、トロープ説を支えているある唯名論的な直観に反しているのではないかという疑問を感じ始めている。ここで言う「唯名論的直観」とは、たとえば、緋色の事物に備わっている色性質は、確定性質であるこの緋色だけであり、それに加えて、それとは別の赤さや色といった確定可能性質があるわけではないという直観である。実現性質のトロープと被実現性質のトロープの部分全体関係を認める第三の選択肢では、この直観に反して、緋色の事物には、緋色のトロープだけでなく、それによって実現されている赤さのトロープや色のトロープも備わっていることになるのである。もちろん、トロープ説である以上、普遍者としての赤さや色が認められることになるわけではない。この意味では、第三の選択肢も最低限の唯名論的直観を維持していると言えるかもしれない。しかし、トロープであれ、確定可能性質というある意味でタイプの存在を認めることは、普遍者としての性質の存在を認めることに限りなく近い一步を踏み出すことになってしまうのではないだろうか。この疑問点についての詳細な検討は、今後の課題としたい。

の不成立を含意するのだとしたら、それは、普遍者としての性質に、条件的力能の束には尽きない本質的な要素があるということを意味すると考えられる。そうであるならば、その例化ないし実例であるところの個別者としての性質には、そのような要素がないとなぜ考えられるのだろうか。問題の要素が、普遍者としての性質にとって不可欠な要素であるとするならば、その要素は、個別者としての性質にとっても同様に不可欠な要素ではないのだろうか。そうだとすれば、個別者としての性質においても、条件的力能の束への還元は不可能であり、したがって、被実現性質と実現性質の間の部分全体関係は成り立たないということを認めざるをえないように思われる。それゆえ、シューメイカーの実現理論の眼目は失われ、心的因果の問題を解決できないことになってしまうのではないか。

以上の点は、ハイルのトロープ説にも当てはまる。ハイルのトロープ説では、文字通り、被実現性質のトロープと実現性質のトロープの間に部分全体関係が成立するとは言わない。しかし、あるトロープがある被実現性質のトロープであることにとって十分な条件的力能の集合と、同一のトロープがある実現性質のトロープであることにとって十分な条件的力能の集合の間に部分全体関係が成立するという主張が、心的因果の問題の解決にとっては不可欠であった。もし、ある性質であることにとって不可欠であるような、条件的力能の束に尽きない要素があるのだとしたら、この主張を維持することはできないのである。

以上の考察が適切であるとするならば、心的因果の問題を解決するためには、結局、シューメイカーの実現理論は、普遍者としての性質の存在を認めるにせよ認めないにせよ、非還元的因果説に基づくものであってはならないということになる。なぜなら、以上で見たように、還元的因果説を放棄したシューメイカーに残された選択肢は、いずれも、心的因果を解決することができないものだったからである。結局のところ、シューメイカーは、自らを窮地に追いやる選択をしまったのではないだろうか。

6.4 概念的相互依存関係と還元的因果説の両立可能性

しかし、まだ結論を出すべきではない。検討すべき点はもう一つある。それは、そもそもシューメイカーが還元的因果説を放棄する必要があるのだろうかという点である。

還元的因果説と非還元的因果説のどちらを採るかという点が問題だったのは、それによって、シューメイカーの実現理論の眼目である「被実現性質と実現性質の間の部分全体関係」が成り立つかどうか左右されると考えられたからだだった。先に見たように、シューメイカーは、還元的因果説を放棄すべき理由として、性質と力能の間に概念的相互依存関係があるという点を挙げる。しかし、この相互依存関係は、本当に、被実現性質と実現性質の間の部分全体関係を否定してしまうようなものなのだろうか。

そうではないように思われる。なぜなら、性質と力能の間に概念的相互依存関係があるということは、単に、世界の存在論的な基本的要素としては、性質と力能の両方を相互依存的なものとして同時に認めるほかないということにすぎないからである。このことは、シューメイカー自身も認めるように (Shoemaker [1998] p.413)、条件的力能の束によって個々の性質の同一性基準が与えられるという点を何ら否定しない。つまり、ある性質であることにとって不可欠であるような、条件的力能の束に尽きない本質的要素がある、ということになるわけではないのである。それゆえ、条件的力能の集合同士の間に部分全体関係が成り立つならば、それらに対応する性質同士の間にも文字通り部分全体関係が成り立つと言うことができるのである。

したがって、還元的因果説の実質が、条件的力能の束によって個々の性質の同一性基準が与えられ、被実現性質と実現性質の間に部分全体関係が成立するという点にあるのだとしたら、その意味での還元的因果説を、シューメイカーは何ら放棄する必要はない。そして、この還元的因果説に基づく実現理論でなければ心的因果の問題を解決することはできない。つまり、普遍者としての性質の存在を認めるにせよ認めないにせよ、この「還元的因果説に基づく実現理論」こそが、シューメイカーの実現理論のあるべき姿なのである。

7. おわりに

第2節で確認したように、物的一元論において心的因果の問題を解決するには、ジレンマを回避するための第三の選択肢がなければならないと考えられる。そして、以上で示したようなシューメイカーの「還元的因果説に基づく実現理論」こそが、その第三の選択肢にふさわしいものである。つまり、シューメイカーの「還元的因果説に基づく実現理論」こそが、物的一元論

が心的因果の問題を解決するために選択すべきものである¹⁴。

参考文献（再録表示のある文献の場合、本文や註で示した頁は再録版による）

- Burge, T., 1993, "Mind-body causation and explanatory practice", in J. Heil and A. Mele (eds.), *Mental Causation*, Oxford: Oxford University Press.
- Ehring, D., 2003, "Part-whole physicalism and mental causation", *Synthese* 136: 359–88.
- Fodor, J., 1989, "Making mind matter more", *Philosophical Topics* 17: 59–79.
- Funkhouser, E., 2006, "The determinable-determinate relation", *Noûs* 40: 548–69.
- Heil, J., 2003, "Multiply realized properties", in S. Walter and H. Heckmann (eds.), *Physicalism and Mental Causation: The Metaphysics of Mind and Action*, Exeter: Imprint Academic.
- Kim, K., 1998, *Mind in a Physical World: An Essay on the Mind-Body Problem and Mental Causation*, Cambridge, MA: MIT Press.

¹⁴ 以上の議論は、あくまでも、心的因果の問題（および個別科学的性質一般の因果的効力に関する同様の問題）は解決すべき問題であると考え、物的一元論者に内在的な問題についての議論であると理解されたい。実を言うとして私自身は、この心的因果の問題がそもそも解決すべき問題であるのかどうかという点に疑いを持っている。というのも、心的因果が成立すると通常は考えられるからこそ、それをいかにして説明するかという心的因果の問題が生じるのに対して、そもそも本当に心的因果が成立する（心的性質に因果的効力がある）のかどうかには大いに議論の余地があると考えているからである（もっとも、心的性質以外の個別科学的性質に関しては、シューメイカーの解決策によって解決されるべき問題であると考えている）。シューメイカーは、心的因果が成立すると考え、心的性質を条件的力能の束として理解するが、これは、心的性質に関してさまざまな因果法則が成立すると考えることにほかならない。しかし、命題的な志向的内容を持つ心的状態（たとえば信念や欲求）には、合理性の規範に従うという特徴がある。そして、合理性の秩序に属するものは法則性の秩序には属さないという「心的なものの非法則性」の議論がある。この議論が正しいとすれば、「（非法則的一元論）の議論における心的出来事とは異なり」心的性質を因果性の秩序のうちに位置づけることはできないはずである。いずれにせよ、心的なものの法則性が成立して初めて、心的因果は解決すべき問題であると同時に（シューメイカーの解決策により）解決可能な問題となる。それゆえ、心的因果の問題は結局のところ心的なものの法則性の問題に帰着すると言えるだろう。

- Robb, D., 1997, "The properties of mental causation", *The Philosophical Quarterly* 47: 178–94.
- Shoemaker, S., 1980, "Causality and properties", in P. van Inwagen (ed.), *Time and Cause*, Dordrecht, Netherlands: D. Reidel Publishing Co. (reprinted in S. Shoemaker, 2003, *Identity, Cause, and Mind*, Expanded Edition, Oxford: Clarendon Press, pp.206–33.)
- Shoemaker, S., 1998, "Causal and metaphysical necessity", *Pacific Philosophical Quarterly* 79: 59–77. (reprinted in S. Shoemaker, 2003, *Identity, Cause, and Mind*, Expanded Edition, Oxford: Clarendon Press, pp.407–26.)
- Shoemaker, S., 2001, "Realization and mental causation", in C. Gillett and B. Loewer (eds.), *Physicalism and Its Discontents*, Cambridge: Cambridge University Press, pp.74–98. (reprinted in S. Shoemaker, 2003, *Identity, Cause, and Mind*, Expanded Edition, Oxford: Clarendon Press, pp.427–51.)
- Shoemaker, S., 2007, *Physical Realization*, Oxford: Oxford University Press.
- Yablo, S., 1992, "Mental causation", *Philosophical Review* 101: 245–80.
- (2008年12月24日投稿、2009年7月28日再投稿、2009年8月10日掲載決定)